

# 飛騨川流域地方における食生活調査に関する補論

## その1 食生活の近代化傾向と食生活をとりまく諸条件の変化

松 田 延 一

### The Investigation Conducted on the Dietary Life of the Inhabitants in the Basin of the River Hida

#### Part 1. Tendency toward Modernization of the Dietary Life and Changes of the Conditions Underlying the Modernization

by

Nobukazu MATSUDA.

#### ま え が き

まずこの報告を書くことになったいきさつについて一言しなければならない。筆者は「飛騨川流域地方における食生活調査」そのものには参加する機会がなかったが、その調査結果の一部についての報告（昭和44年5月25日、日本家政学会中部支部総会における熊沢報告、「食品摂取頻度からみた食生活の状況」および鈴木報告「食生活の背景について」を指す）を聞き大いに啓発せられるところがあった。筆者自身もかねてから、農山村民の食生活の動向や、その変化について関心をもっていたから、何等かの機会に所見をまとめてみたいと思っていたために、その後上記の2人の報告者と論議をかさねていく間に、幾分考えを整理することができたので、ここに筆をとることにした。もともと上記の報告者は栄養の側から接近せられているのに対して、筆者の場合は主として経済的側面からの接近を試みようとするものである。この限りにおいて、この論考は前記2人の報文に対する補論の役割を果たすことをひそかに念願している。なお上記の2報告はさらに検討の上本稿に相前後して掲載せられていることを附言しておく。

筆者の本稿における意図は上述の通りであるが、このためにも現地調査をする必要を認めたが、その機会を持たなかったので、主として統計面に現われたところによって、論議を進めることにする。（別稿、補論その2「食生活の近代化傾向と農家の食糧生産の動向」はとくにそうである）。しかしまた、幸いに筆者はこの調査地域については若干の予備知識をもっているし、筆者の郷里もこの地域に含まれているから（美濃加茂市）、これまでに知っていることを中心にし、さらに昭和44年8月下旬に同地に、古老を訪ねて行なった補充的調査の結果をも加えて考察することにした。

従って本稿でとりあげる食生活の近代化傾向と食生活をめぐる諸条件の考察は、美濃加茂市の農村地域の実態を中心に進めることになる。もちろん他の地域はこれと若干のずれが、ある場合もあると考えるが、大勢には（本質的考察には）ほとんど影響がないと思惟せられる。従

って他の地域はこれによって類推することにする。

## 本 論

### A 食生活の意義

一般に「食生活」とは何か。この意義を問題にする場合、何人も、まず食物の摂り方を考えるであろう。すなわち摂取する食物の種類や、それに含まれ、人間に利用される栄養成分の問題が思い浮べられるであろう。しかしそれは狭義の食生活であると考えられる。というのは、食生活は元来、衣生活・住生活とともに人間生活の食物に関する物的側面を現わすものであるから、食生活は、上述のような狭義のもの外に、これを支える諸条件、例えば調理の内容、仕方も考えられるであろうし、調理をするために必要な水、燃料、炊事用具、食器、その他食生活を円滑に遂行するために必要な諸用具（例えば冷蔵庫や食卓など）、諸手段も、食生活の成立発展と全く無関係のものではあり得ない。この意味においてこれらをも含めた意味における食生活を広義の食生活と呼ぶのが適切であると考えられる。

また食習慣という言葉があるが、人々の営む食生活が繰り返えされ、慣習化し、いわば一つのパターンを形成している場合に食習慣といい、その内容としては、食物の種類、加工、調理や食事の様式までも含めるようである。従ってそれは、われわれがここでいう食生活と内容的にはほとんど一致するものと考えられる。

注 いわゆる「食生活」について、その内容的把握の仕方は、学者によって幾分異なっている。例えば渡辺実教授の「日本食生活史」<sup>1)</sup>によれば、食生活は、広義には食生活全般にわたっているとなし、それは精神的、肉体的な方面や政治、経済、社会、思想、芸術、技術、文化の面や、気候、風土、民族、国民性にも関連しているから、食生活史はそうした点から考察する必要性が説かれている。趣旨はよく理解し得られるが少しく範囲を拡張し過ぎたものようにも考えられる。

### B 食生活の近代化とは何か。

食生活の近代化とは何か。これについては別稿にゆずることとする。ここでは近年わが国民の生活水準は向上し、食生活のパターンは欧米型に接近しつつあるといわれていること、そしてその傾向は都市生活者に強くみられていること、従って農山村民はそれよりもかなりおこなっていることなどから、農山村民の食生活の近代化傾向とは、便宜上、その都市的水準への接近の傾向と考えることにする。もちろん都市生活者の食生活が、全く好ましい状態にあるとはいえないが、平均的にいえば、農山村生活者に比べると、より合理的な水準にあり、近代化していると考えられる（例、厚生省の国民栄養調査の結果からもこのことは明らかである）。

それ故に本稿では農山村民の食生活の近代化を上述の視点からとらえ、この食生活近代化の波は、食生活をとりまく諸条件—背景—に対して、どのような形で、具体化せられつつあるかを考察することになる。

### C 食生活をめぐる諸条件の発展方向

食生活の遂行に直接関係し、且つこれを支える諸要因、例えば水、燃料、その他炊事用具や冷蔵庫などは、経済的文化的発展とともに発展し、変化するが、それらがまた、食生活そのものにも影響を及ぼすことも亦事実である。

今日の都市生活においては、上水道、都市ガスあるいはプロパンガス、電熱が、炊事に用いられるが、かつては木炭、「たぎぎ」が燃料として広く用いられていたし、また上水道の設置以前は井戸水が普遍的に利用せられていたことはいままでもない。そして、これらに対応して、かまどや鍋、釜の形式（形態）も変化してきたと考えられる。

ここではいわゆる食生活の背景が、対象地域でどのように変化しつつあるかを考察する。詳しい具体的事例については別の報告（鈴木妃佐子：食生活を取りまく諸条件について）にゆずり、ここでは、それらを買って存在する発展の流れを考察し、具体的事例における農家行動の位置付けのための資料を提供したいと思う。

そこで食生活の諸条件を形成する主要なものについて、個別的観察をしよう。

#### (1) 燃 料

食物を調理するための燃料源として、農山村では、いろいろなものが用いられた。平地部の水田地帯では稲や麦などのこうかん（藁稈）類や、もみ殻を燃料に用いた。このように平地部の水田地帯では山林がないから、山林起源の燃料を使用しようとするれば、当然購入しなければならないので、上述の自給的燃料を主材料にしていたのである。

住居の近くに山林（いわゆる里山）をもっている地域では、かつては落葉をかき集めて燃料にしていた。その落葉はくぬぎなら、その他の落葉雑木林の中でかき集めたり、松、杉の落葉をかき集めたりしたものである。前者を「ドサゴ」、後者とくに松の落葉を「マツゴ」と称して区別した。「ドサゴ」よりも「マツゴ」の方が火力が強いので上位にランクせられていた。また雑木林の伐採跡の落葉には、とくに枯枝が多く混入しているために、その伐採跡の落葉は必ず、ていねいにかき集められた（美濃加茂市の例）。

そして農家のこの落葉集めは、秋から冬にかけての婦人や子供の仕事であった。1戸当り落葉を120～130束（直径7～80cm、長さ120～140cm位に結束したもの）を冬から春にかけての燃料（主として炊事用）に用いた。もちろん「そだ」や桑の枯れ枝なども用いたが、冬期の燃料は落葉とくに「ドサゴ」を、春から夏にかけては「マツゴ」や「そだ」を用いたものである。

「そだ」は雑木林を伐採した際に生ずる枝の部分を集めて結束し、これを屋根裏に生のまま格納し、1～2年後に自家の燃料として利用し、又、薪（たきだ）とともに販売した（瓦焼き用又は多治見の窯業の燃料或いは商店などの燃料として）ものであった。

「たきぎ」は平素はほとんど使用しなかった。ただ冠婚葬祭とか、正月の餅つき、味噌豆蒸し、豆腐造りなどの場合に用いた程度であって、自家生産のものは殆んど販売した。

このようにして、里山のある農山村部では、こうかん（藁稈）類、とくに稲わらや麦わらは燃料として利用せられず、1. 落葉樹の落葉（ドサゴ）、2. 松杉の落葉とくにマツゴ、3. 枯枝、4. 「そだ」、5. 「たきぎ」、6. 木炭（炊事用としては、極く稀に用いられたに過ぎないが）の順に価値付けられていた（燃料の価値序列）（美濃加茂市）。

山間部に入ると、2以下のものが順次序列に入ったようである。そしてこのような燃料価値の序列は昭和33～4年頃まで、一般的なものとして認められていた。しかし今日では極めて一部の農家が、風呂用燃料のたきつけに落葉を利用するに止まっている（美濃加茂市）。

ところが昭和30年代（とくにその後半）に入って、他により有利な就労機会が生ずるにおよんで、落葉かきをやめ、「そだ」を燃料にするようになり（「そだ」の販売を中止）、さらに「たきぎ」が用いられるようになった。これには都市、あるいは町でプロパンガスが、広く用いられるようになったために、「たきぎ」や炭の需要が減少したことも影響している。ともかくこの段階において、農家はこれまで上位にランクしていた燃料を日常生活に使うようになったのである。

しかし都市で普及したプロパンガスは、またたく間に、農山村へも押しよせてきた。昭和33～34年には、例えば美濃加茂市の農村部にもかなり進出してきた。当初は、この地域は里山に恵まれているために、プロパンガスは農家の補助燃料として、例えば湯茶をわかす程度にしか

利用せられなかった。ところが数年後にはプロパン用の飯たき釜が普及し、広く炊事用にプロパンガスが用いられるようになった。この現象は昭和40年代に入って一層強化せられ、今やほとんど全戸がプロパンガスで炊事をなし、「たきぎ」や「そだ」は一部の農家における補助燃料に転落した。「たきぎ」や「そだ」は今日では各戸の風呂の主燃料と化したのである。このようにして落葉からプロパンガスへの転化過程は、実に10年ならずして、普遍化していったのである（美濃加茂市）。これ正しく、農家生活における「燃料革命」というに値する現象である。

このように炊事用燃料の面においても、近年農村は、都市化したといえる。この傾向は調査地域の調査対象についても認められるところであるが（鈴木報告参照<sup>2)</sup>）。さらに調査地域全般について、例えば1965年農業センサス<sup>3)</sup>の結果からもみられる。もちろん土地の事情により若干、都市化の程度の差はあるが、第1表を参照せられよ。

| 経済地帯 | 調査地区数 |                |               |                 |              |
|------|-------|----------------|---------------|-----------------|--------------|
|      | 総数    | 利用している農家が殆んどない | わずかな農家が利用している | 半分くらいの農家が利用している | 殆んど農家が利用している |
| 平地農村 | 114   | 1              | 1             | 5               | 107          |
| 農山村  | 193   | —              | 7             | 28              | 158          |
| 山村   | 503   | 6              | 18            | 39              | 440          |
| 平地農村 | 100.0 | 0.9            | 0.9           | 4.4             | 93.8         |
| 農山村  | 100.0 | —              | 3.6           | 14.5            | 81.9         |
| 山村   | 100.0 | 1.1            | 3.6           | 7.8             | 87.5         |

第1表 炊事用ガスの利用状況（1965年）

備考：本表は農林省統計調査部、1965年農業センサス、21、岐阜県統計書により計算したものである。

なお、経済地帯の区分については、本報告書の鈴木妃佐子、食生活をとりまく諸条件について、を参照せられたい。

第1表にみるように、昭和40年の調査時において、ガス利用（もちろんプロパンガスであるが）が、最も普及しているのは平地農村で、次いで山村、農山村の順となっている。山村における普及率が、農山村よりも高いのは、山村地域の中にも、飛驒川沿岸の下呂、萩原、金山などのやや進んだ地域が含まれていること、山村には白川、東白川などのややおくれた地域を含んでいるからであると思う。

以上述べたことから推論し得られることは、調査地域の農家の燃料は落葉→「そだ」→「たきぎ」→木炭→プロパン・ガスの方向をとって発展してきたが、これは都市生活者の燃料消費の発展過程である「そだ」→「たきぎ」または木炭→ガス、というあゆみと同じ方向であった。しかし注意すべきことは農山村はこの過程を、極めて短期間に歩み、都市化したということである。また都市の大部分ではガスの外、電熱も相当広く普及しているが、（例、トースター、電熱利用の湯わかし器）、農村では食生活の関係上、都市ほどには、これら（とくにトースター）の利用率は低いと考えられる。また都市の極く一部では電子レンジも利用せられつつあるが、これらのものも、将来農村に入っていくものと考えられる。

このように農村における燃料利用の発展方向は、都市水準に追いつく方向におかれていると

いえる。

## (2) 水、とくに水道水

炊事用の水は、地域によって、川流、泉あるいは井戸からもとめられた。そしてこれを運ぶためには、かつては木製の手のついたおけ（手おけ）が、後にはブリキ製のバケツが用いられたが、近年は水道によるものが増加した。

農山村における水道の普及には、とくに昭和30年以後の新農村建設計画（5か年で終了）において、簡易水道の設置に対する国庫助成がなされたことが、大きく影響している。もちろん大型の水道も厚生省によって奨励せられたこともあるが、農山村ではむしろ簡易水道が多い。この簡易水道の普及を可能ならしめた技術的要因は、昭和30年代に入ってから、ビニール管が水道管として手軽に利用せられ得るようになってからである。いわゆる「ビニール革命」の恩恵が農山村にも及んだのである。

このように炊事用水の水道化傾向も、農山村における食生活の近代化傾向（都市化傾向）の一つの現われであるといえる。

## (3) 鍋・釜など

農山村における炊事用燃料の変化（近代化）と、冬期における採暖形式が、これまでの「いろり」から、戦後は火鉢→石油ストーブへと変化するにつれて、伝統的な「いろり」は寒冷地を除いて、無用の長物化するようになってきた。このために鍋も、伝統的な鉄の「つりなべ」から、「かけなべ」ともいうべきものに変化し、その材質もアルミニウム製に代った。また鉄製の焼き鍋に対し、アルミニウム製、あるいはステンレス製のフライパンや中華鍋が次第につけ加わるようになってきた。

このような変化をもたらしたのは、終戦後の食糧難の時代に、食糧との「物交」のために、ヤミ商人がアルミニウム製の釜、鍋、やかんなどを供給したことに始まる。そしてその後の燃料革命により、プロパンガスが炊事用の主燃料化するにつれ、プロパンガス用の飯たき釜が普及し、さらに農村の食生活の変化に伴って、フライパンや中華鍋が次第に普及するようになった。そして今日では調査地域における台所の景観は、戦後の台所改善と相俟って一変し、次第に都市的様式の台所に、都市的な炊事用具がみられるようになってきた。

この外電気冷蔵庫の普及によって、農村の台所用具の都市化傾向は一層著しくなってきた。もちろんこの都市化傾向は地域により、相異のあることは説明するまでもない、詳しくは鈴木報告を参照せられたい。ただ1例として電気冷蔵庫の普及率を経済地帯別にみると、平地農村84%に対し、農山村42%、山村36%となっている。この点からみても、調査地域における食生活をとりまく諸条件は、平地農村、農山村、山村の順に都市化の傾向をたどっているといえよう（鈴木報告参照）

注 1965年農業センサスによって、調査地域の経済地帯別電気冷蔵庫の普及状況を見ると、平地農村は、33.8%、農山村15.4%、山村11.5%となっている。本文に示した普及率と著しく相異するのは、調査時期と調査方法の差によるものであろう。しかし経済地帯別の普及の格差は近似している。われわれはこの点を注目すべきであると思う。

## (4) 食卓・食器

食生活の変化に対応して、農家の食生活をとりまく諸習慣の変化が起る。例えば、かつては農村では「はこせん」箱膳が使用せられ、個人毎に「はし」と「飯茶わん」と小皿一枚はそこ

へ収納せられていた。それが大太平洋戦争中（約25年前）に家族共通の食卓を利用する家庭がふえてきた。食卓には個人の「茶わん」と「はし」を置くことになった（食卓の引出しに入れる場合もある）。

この「はこぜん」から食卓への変化は、形式的には一応、都市化したものとみられる。ところでこの「はこぜん」から食卓への変化に対応して、食卓がこれまでよりも、にぎやかになってきたことは見逃せない。つまり食物とくに副食物の品数が、ふえる傾向がみられた。すなわちこれまでの総菜的な煮付（あるいは汁の多い多種類のものの混合煮付）から、単純化し、単品化したものが、多数の器物（井や鉢、皿）に盛り付けせられて、食卓をにぎやかにするようになったのである。例えば、夏期ならかぼちゃ、なす、いんげん、ピーマン、じゃがいもなどを混合して煮付けとしたものが、2～3品に分けて調理せられ、別々に盛り付けせられるというように。

この傾向は都市生活者において、すでにかなり以前から見られるところであったが、これが農村にも波及しはじめるのは、昭和のはじめ頃から戦前にかけてであった。しかし戦時中一時逆行したが、戦後、とくに昭和30年代の後半に入って、明白にこの傾向をたどるようになったのである。昭和30年代に入って、この傾向に拍車をかけたのは、その頃から農家の所得水準が著しく上昇してきたこと。トラックや小型自動車の普及によって、都市起源の食品が農村へ容易に供給せられ得るようになってきたからである。なおその先行的状態は、終戦後の食糧不足の時代に、ヤミ商人により魚や肉と米との物交がなされ、これによって農家の食生活の変化が起ったことにみられた。（例、美濃加茂市ほか米の生産額の多い地域で広く見られた）。

このような食卓の出現と食事そのものの変化とは、現象的には相前後して起ったが、両者の間に因果関係は必ずしも認められないと思われる。強いていえば、農民の経済生活の進歩、向上という一つの流れにおいて起った偶然的な随伴現象であるというべきであろう。

次に「はこぜん」から食卓化に関連して、食器も変わり、伝統的な皿に洋皿が加わり、「はし」にスプーンが加わり、煎茶、番茶器に紅茶、コーヒー茶わんが加わるようになってきたことは事実である。そしてカレーライス、炒飯、あるいはラーメンや紅茶、コーヒーなどこれまでの農村ではみられなかったものが、食卓に上るようになった。「いためごはん」は古くからあったが、それは単なるイタメ（加熱）により飯の腐敗を防止する目的で使われたもので、今日の都市民の「いためごはん」あるいは炒飯とは質的に異なるものである。

ともかくこのようにして農村に、伝統的食物に対して、新しい食物が次第に導入せられるようになってきたが、それはだいたい昭和30年代に入ってからのことである。そしてその傾向がとくに著しく現われてきたのは、昭和38年以後、とくに昭和40年代に入ってからであった。昭和38～9年頃になって、地方の中小都市にもスーパー・マーケットが生れてきた（美濃太田のそれは昭和38年）。このスーパー・マーケットの出現は、近村の農家の食生活の近代化にも一役買うことになった。

さてこのような段階に入ると、農村家族の食器がこれまでの個人専用的色彩の強かったものから、家族員の共同利用のものとの比重が次第に高まってくる。個人の「はこぜん」から共同の食卓への変化に対応するかのようになり、食器（例えば小皿、「汁わん」、洋皿など）の個人専用物の範囲が次第に縮小し、反対に家族の共同利用物の範囲が次第に拡大せられてきたようである。

以上述べた諸傾向は、都市の方は一足先きに進んで実現したものである。その限りにおいて近年の農村における変化の方向は、都市化傾向をたどっているといえる。

### (5) 食料貯蔵手段

わが国の農家が広く行なってきた、食糧の貯蔵手段は、乾燥、塩蔵のほか、完全貯蔵、低温貯蔵などがある。ここでとくに問題にするのは低温貯蔵である。

農家は夏期の高温時には井戸又は泉、あるいは冷風の通路に食料品を一時的に貯蔵したが、近年は電気冷蔵庫の普及により、貯蔵は一段と容易となった。この電気冷蔵庫の普及こそは、農山村民の食生活に一つの「革命」をもたらす契機になったと考えられる。その理由、農山村における近年のインスタント食品や魚や肉類の加工品とくにソーセージ、ハム、ちくわ、かまぼこなどの消費増加は実に目ざましいものがあるが、そのような消費増加をもたらした要因の一つは、たしかにそれらの貯蔵手段としての電気冷蔵庫の普及によるものである。また近年農村においてビールの消費増加が認められているが、これもまた電気冷蔵庫の普及と関係があると考えられる、(とくに夏期)。1965年の農業センサスによって、調査地域における電気冷蔵庫の普及状況を示すと第2表のようである。これによると、平地農村が最も普及率が大きく次いで農山村、山村の順になっており、さきに述べた、食生活の背景になる諸要因の配列順序と同様の傾向が見られる。

| 地 帯     | 調査地区総数 | A や B を持っている農家のある調査地区数 | A や B をもっている農家数 | 農 家 総 数 | 農家総数に対する割合 |
|---------|--------|------------------------|-----------------|---------|------------|
| 平 地 農 村 | 1 1 4  | 1 1 2                  | 1,075戸          | 3,185戸  | 33.8%      |
| 農 山 村   | 1 9 4  | 1 6 8                  | 880             | 5,710   | 15.4       |
| 山 村     | 5 0 3  | 3 7 7                  | 1,504           | 13,066  | 11.5       |

第2表 電気冷蔵庫の普及状況 (1965)

備考：1. 前表と同じ

2. 表中 A は電気冷蔵庫 B はガス冷蔵庫をさす

注 本文でみたように、電気冷蔵庫の普及率の地域差は、地域による生活水準の差をある程度反映している。一般の所得水準が低い間は、所得よりも、地域による気候的条件の差の方が、電気冷蔵庫の普及率の地域差を説明するための、有力な論拠であり得たが、今日のように、ある程度所得水準が上昇すると、気候的要因よりも所得要因の方が、より有力な説明要因となるにちがいない。というのはいわゆる寒冷地でも、夏期は気温が相当上昇し腐敗菌の繁殖を助長し得る状態になるからである。

### D 食生活の背景変化の起動力

上述のような食生活の背景を都市化の方向において変化せしめたものは何であるか。これについては、具体的な事例調査を行なわなかったから、一般に考えられることを述べることにする。さてその主な要因をかぞえあげると次の通りである。

#### (1) 都市生活の模倣努力

農村の若者のあこがれの生活様式が、都市生活にあることは、周知のところであるが、事実農村の生活様式よりも、都市のそれがより合理的なものをもっている。そこで食生活においても、都市化を図ろうと努力する。その努力の一環として、食生活背景の都市化、近代化が日程に上ったのである。だから農村民としては、さし当りの努力目標を、現在の都市水準のそれにおいているようにみえる。それを模倣努力ということが出来るし、また都市生活様式のデモンストラーション効果の現われともみられる。

(2) このような農民の意欲を実現せしめるに貢献したものは、農民の所得水準の向上である。この所得水準は、農産物価格の良さとともに、都市的産業の発展を軸とする。非農業部門の雇用力の増大と、これに対応する農の兼業化の促進によって実現せられたことはまちがいない事実である。この間の消息は例えば兼業農家率の増加傾向によってもこれを知ることができる。第3表参照。

| 地 帯     | 1950 |      |      | 1960 |      |      | 1965 |      |      |
|---------|------|------|------|------|------|------|------|------|------|
|         | 専 業  | 1 兼  | 2 兼  | 専 業  | 1 兼  | 2 兼  | 専 業  | 1 兼  | 2 兼  |
| 平 地 農 村 | 57.7 | 26.6 | 15.7 | 32.2 | 43.6 | 24.2 | 13.3 | 35.5 | 51.2 |
| 農 山 村   | 51.7 | 31.0 | 17.3 | 24.2 | 46.5 | 23.9 | 14.4 | 42.8 | 42.8 |
| 山 村     | 21.3 | 53.0 | 25.7 | 11.3 | 51.9 | 36.8 | 7.7  | 39.9 | 52.4 |

第3表 専兼業別農家構成比の推移 (%)

備考：1. 前表と同じ

2. 1兼は第1種兼業農家、2兼は第2種兼業農家

以上のような兼業化の進展につれて、農家の農業所得は増大した。このために広く農村生活の合理化、近代化のための起動力は整備せられた。この整備は、およそ昭和38年以後のことである。(後掲の拙論参照)

(3) 次に農家の生活改善、その近代化意欲をかきたてたものには、農林省の生活改善普及事業とラジオ、テレビなどによる栄養改善のための知識と技術の普及がある。これについてはあえて多言するまでもないと思う。

以上の諸要因が相乗せられて、近年、とくに著しく、農村における食生活の近代化が促進せられたが、このことは本調査地域についてもいい得ることである。

## 結 論

以上述べたところを要約して結論に代えよう。

(1) 筆者は調査地域における農山村民の食生活の近代化傾向を食生活をめぐる諸条件変化の角度から考察したが、その根底にある事実関係は、主として、調査地域のなかでは最も交通地位もよく、且つ経済的水準も高い美濃加茂市の北部にある部落を念頭において検討した。そしてその他の地域については、統計を用いて、地域的な変化の姿を描き出し、もって、調査地域における食生活をめぐる諸条件の変化が、どのようにしてもたらされ、且つそれが地域的にどのような差異を示しているかを明らかにしようとした。

(2) この目的のために本稿では、いわゆる食生活をめぐる諸条件の変化を燃料、水、炊事用具、食卓、食品貯蔵手段としての電気冷蔵庫について考察した。そしてそれらの変化の方向は一言にいえば、都市の生活様式に接近する方向にある——以下単に、都市化的傾向という——ことを明らかにした。

(3) ところでこのような都市化的傾向は、如何にして起ったか、ということが次に問題にせられる。その一つの要因は、農、林家——以下単に農家という——の所得の増大が考えられる。そしてこの農家の所得の増大をもたらしたものには、とくに戦後の状態についていえば、農地改革、農産物価格の良さ(相対的高水準)、肥料、農薬の多投、品種改良、機械化、その他作物や家畜の栽培、飼育管理技術の革新などによる農業の生産性の向上とともに、さらに農



家の農外所得の増加、つまり兼業化の促進などの諸要因がある。第2には農民が都市の生活様式を模倣し、これに接近することに努めたことが考えられる。これは農家が意識的に努力したか、あるいは無意識的に努力したかはともかく、実際に政策当局によって、指導せられ助長せられたことは事実であり、その指導奨励の内容が、都市化的傾向を指向していたこともまた事実であるし、農家がこれを受け容れたこともたしかである（台所改善、栄養改善を軸とする生活改善）。

(4) このような農村生活の合理化の一環として、食生活の背景となる諸条件が、都市化傾向をたどり、それがいわゆる近代化傾向をたどるものであると、一般に考えられているが、そのこと自体の価値判断は、別個に存在し得るが、今日のわが国の農山村の実情は、調査地でもみられたように、例えば燃料では「そだ」→「たきぎ」→プロパンガスの方向をたどり、水は水道化、いろりの廃止、かまど化→ガスレンジなど都市化傾向をたどっていることは、事実である。

注 いろりは従来炊事の間であるとともに家族の採暖と団らんの間であったが、後者の機能は、近年石油ストーブの普及によってその意義を失ないつつある。寒冷地においては、今日なおいろりは重要性もっているが、比較的暖かい地域においてはもはや無用の長物化しており、さらにはその姿を消すようになっている（例、美濃加茂市）。この点からいうと農村の「燃料革命」を担当したものは、プロパンガスと石油であったということができる。

また炊事用具、食器も、伝統的なものに対して、新しいものが付け加わり、さらに食卓が一般化するというように、これらの都市化傾向が起ってきた。

(5) このような農村の食生活をめぐる諸条件が都市化する傾向があり、それはとくに昭和38年以後急速に起った。このことは国民所得倍増政策の効果が、調査地域にも、著しく及んできたことに対応するものといえよう。

(6) 次にわれわれは、この都市化傾向の程度は、経済地帯別にみると、平地農村、農山村、山村の順に整序せられていることを認めた。このことを別の表現をもってすれば、経済生活における時間的発展の秩序は、ある程度、空間的発展の秩序の姿の中に、具現せられているといえる。いいかえると、空間的な地域差は、その土地の自然的社会的、経済的諸条件の差に反映せられているから、(3)に述べた、都市化要因の作用の仕方が、地域的に相異なるからである。

(7) これに関連して、同じ地域でも、農家と非農家との間にも差がみられることは、理論的にも、十分想定せられるし、事実においてもそうであることは、鈴木報告、熊沢報告<sup>4)</sup>において明らかにした通りである。このことは同一地域においては、概ね農家は商家、サラリーマン家庭よりも、上述の意味における都市化傾向がおくれて進行していることを示すものであり、（平均的にみてのことであるが）、そしてこのような現象をひき起した最大の要因は所得要因であると考えられる。

(8) 最後に本稿で考察したような農村民の食生活をめぐる諸条件の都市化傾向は、単に食生活の面のみに限らず、生活意識、生活態度の都市化傾向によって、生活様式（食生活はもちろん、被服、住居、身だしなみなど）の都市化傾向のなかの一環としての存在形態であること、従っていわば今日の日本の文明問題の一つの現われであるというべきであろう。

(9) 従って本調査地域にみられた諸傾向は、ひとりこの地域のみの現象ではなく、他の地域の農山村についても、程度の差こそあれ見られるであろう。

いわゆる食生活をめぐる諸条件は食生活そのものと同様に、地方により、また家により、若干の変異はもちろんあるが、大勢としては上述のような方向をたどっている。問題はその方向

をどの程度にたどっているか（地域差，家庭差）ということを見極め，その都市化促進要因を十分理解して，その土地の事情に適合した合理化，近代化のプログラムをたてることである．このためには，何よりも先づ事実認識が必要である．本稿がこうした問題接近のための一つの捨石ともなれば幸甚である．

最後に本稿の起稿の機線を与えられ，また考察の過程において種々のヒントを与えられた本学の熊沢昭子助教授，鈴木妃佐子講師に対して深く謝意を表わしておく次第である．

## 文 献

- 1) 渡辺 実著：(1964)，日本食生活史 2 頁 吉川弘文館
- 2) 鈴木妃佐子ほか：(1970)，飛騨川流域地方における食生活調査 第 V 報，食生活をとりまく諸条件について，名古屋女子大学紀要 第 16 号
- 3) 農林省統計調査部：(1966)，1965 年 農業センサス，21 岐阜県統計書 農林統計協会
- 4) 鈴木 前掲論文  
熊沢昭子ほか：(1970) 同調査 第 VI 報 食品摂取頻度からみた食生活の状況